
1.フルートとヴァイオリン

フランス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1・フルートとヴァイオリン

【Nコード】

N0149T

【作者名】

フランス

【あらすじ】

HZ文庫に掲載のものと内容が重複しますが、章毎に皆様の具体的コメントをいただきたく、敢えて再び投稿する次第です。

（前書き）

（主な登場人物）

国谷イサム： 29歳。札幌出身。ピカ忠商事・ウィーン支店の現地雇い。「アルテドナウ・アンサンブル」のフルート奏者。

津軽マミ： 25歳。東京出身。女流ヴァイオリニストを目指している。ウィーン音楽大学の大学院に在籍。灰色の瞳が特徴的。

萩谷オサム： 29歳。ウィーン駐在の新聞記者。イサムとかつて札幌の稲穂小学校で同級生。

ハロルド・チュン： 31歳。IAEAの韓国人職員。「アルテドナウ・アンサンブル」でファースト・フルートを任されている。

フィッシュマン先生： 39歳のルーマニア系オーストリア人。「アルテドナウ・アンサンブル」の指揮者。

キャロル： 27歳。「アルテドナウ・アンサンブル」のコントラバス奏者。アメリカ人。

平原さん： 52歳。ピカ忠商事のウィーン支店で、国谷イサムの先輩職員。

津軽ジュン： 32歳。東京出身。津軽マミの兄。

藤江良子： 27歳。横浜出身。ニューヨーク在住。

盛田さん： 30歳。札幌・拓陽高校時代、空手部で国谷イサムの先輩だった。ピカ忠商事の東京本社に勤務。

「ボタン！」

イサムがウィーン楽友協会に駆けつけた頃には、ブラームス・ザールと呼ばれる小ホールはほぼ満席で、舞台中央のグランド・ピアノも、静かに弾き手を待っていた。

大きく開いた漆黒の反響板が、音の饗宴を約束しているようで、聴衆の期待を、いやが上にも高めている。

イサムは後方の列に自分の席を見つけると、端から、

「申し訳ない」を繰り返しつつ、次々と人を立たせてしまう。しかしついに着席し、ほっと息をついた。

すると間もなく、痩せて背の高い、黒い燕尾服姿の男が、緊張の面持ちで舞台に現れた。

彼は客席に向かうと、右手を心に当て、丁寧にお辞儀すると、にこやかに微笑んだ。

聴衆がそれに応えて、拍手を送る。

ヤッサと言うピアノリストだった。シャープな輪郭と黒髪が、どこか中近東風。

イサムも調子を合わせて拍手したが、そこで舞台寄りに派手に手をたたき、東洋風の若い女性が、目にとまった。

「あまり見ないフロイラインだけど……日本人？」と彼が感じるや否や、拍手がやみ、辺りがしんとする。

そして、その静寂を埋めるかのように、グランド・ピアノの深く甘く、きれいな音色が、会場に響きわたった。

国谷イサムは、札幌生まれの29歳。少しつぶれた感じの、エルヴィス・プレスリー。

もともと彼は、東京でドイツ語を勉強していたが、バロック様式のウィーンの町に魅せられ、ついに留学生となり、建築家を目指す

ことにしたのだ。でも、次第に自分の限界を知るようになり、目抜き通りのケルントナーに面した日系商社「P I K A C H U」に身を寄せていた。

この会社は、ユリウス・マイネル社などと提携し、ワインや生ハム、サラミ、白トリュフやオリーブ油など、食材の輸出入を手がけている。

イサムは、いずれの日にか、正社員になるのが夢だった。給料も増え、結婚できるに違いない、と思うのである。

そんな彼には、この小さな都を「ヴィエンナ・ランド」と揶揄する癖があった。

「2001年にもなるのに、ウィーンはまるで、19世紀のテーマパーク。来る者はみな、オーストリア・ハンガリー帝国時代の栄光や伝統、そして音楽に酔っぱらい、現実を忘れてしまふ」とでも、言いたかったのだろうか。

ウィーンは確かに、第一次世界大戦以前へと、訪問者をいざなう町かも知れない。

旧市街には、王宮をはじめ、帝国時代の遺物が至る所に残されている。

鳥瞰図が欲しいなら、周囲の丘から町を見下ろすと良い。

町の傍らに流れるのが、大河ドナウ。

次に目立つのが、重厚なシュテファン寺院をはじめ、たくさんの教会の尖塔や鐘楼だろう。

それぞれ、まるで天を目指すかのように、高くつくられている。少しでも崇高なものに近づきたい人間の、切ない願いがこめられているに違いない。

その昔、町の周囲には城壁があったらしいが、今では、環状道路「リンクシュトラッセ」にすり替わっている。しかし、城壁内の古い町並みや狭い路地、そして貴族たちの館や宮殿は、そのままだ。

住民たちは、この町を一種の劇場と見做し、貴族的な立ち居振る舞いを気取るらしい。例えば、社交行事には男女ペアで出席し、そ

の際、昔ながらのレディー・ファーストに従うのだ。

そして、それを見にやって来る、たくさんの観光客。

この界限では、名物の二頭立て馬車「フィアカー」が彼らを乗せ、パッコロ、パッコロとゆっくり走り、まるで19世紀にタイム・スリップしたように、のどかな雰囲気を醸し出している。

イサムの聴きに行ったピアノ・リサイタルの二週間後、ウィーン音楽大学にて。

「ヴァイオリン、そこはピアノニツシモ！ 特に押さえて」と、タクト棒を振り上げながら、茶髪でアフロ・ヘア、口ひげのフィツシュマン先生が声を張りあげ、次の瞬間、人差し指で口を押さえる仕草をする。

彼らが繰り返し練習しているのは、シュトラウスの「美しき青きドナウ」だった。

新入りの女性ヴァイオリニストは細身で、真っ直ぐな黒髪が、胸まで届きそうだった。新しそうな深緑のパンツ・スーツに身を包み、いかにも年代を経ていそうな褐色の楽器を顎で押さえ、器用に操っている。

出番待ちのイサムは、フルートを膝に「休め」の姿勢で構えたまま、思いをめぐらせる。

「彼女はまるで、洋装の雪女。あるいは、銀河鉄道999のメーテル。立ち居振舞いも、弓を操る姿も、流麗だ……」

彼女は、確かに東洋人にしては少し色白に見えた。時々、輝くような瞳でこちらを振り向くような気がする。長い黒髪が美しく、物腰柔らかく、あでやか。

ひよっとして、この間のコンサートで見かけた女性？

あ、いけない、そろそろ出番……と思いきや、その途端に、

「フルート、そこをしっかりと！ スタッカートで！」と、指揮台のフィツシュマン教授が、口ひげから声を張りあげた。

すぐ左でファーストを吹いているハロルド・チューンにも、テンシ

ヨンが走る。

しばらくすると、曲目がレハールに変わった。

彼のオペレッタ「メリー・ウイドウ」からの選曲だ。20世紀初頭以来、

ウィーンでは大変ポピュラーな作品で、ロンドン・ミュージカルの『マイ・フェア・レディ』のような古典である。

マエストロ・フィツシュマンが壁の時計を見やると8時だった。彼はそこで満足そうに自分の口ひげを確認すると、アルテドナウ・アンサンブルの楽士達に休憩の合図を送ってくれた。

イサムもほつと息をつき、細長い銀の楽器を口元から離す。

「あの娘は25歳くらい……いや、もう少し年上？　こちらに気づいてくれただろうか？　ひとまず挨拶」と思いながら、イサムは彼女の様子を見に行くことにした。

そして他の奏者、楽器や譜面台に気を遣いながら、彼女の傍らまで来て声をかけた。

「こんにちは。日本の方ですか？」

「あ、こんにちは……」と言いながら彼女は、ひざの上の楽器に両手を添えたまま、彼に視線を合わせてきた。

「国谷です。初めまして」

「津軽です。どうぞ宜しく」と答え、彼女がにっこり微笑んだ。声が深く、しゃべり方が落ち着いている。

そこでイサムは、彼女の瞳が大きいだけでなく、猫の目のように灰色がかっていることに気が付いた。少し、日本人離れているのだろうか？

「ひょつとしてこの間、楽友協会のブラームス・ザールで、ヤツサのピアノ聴いてませんでした？」

「あ！　ばれちゃったかな……」と、彼女が嬉しそうに答える。

「ウィーンは、狭いから……それにしても、よく調和してるね」と言いながら、イサムは笑みを浮かべた。

「いいえ……とんでもない」と彼女がはにかんだ。長く、つややかな黒髪がゆれる。

よく見ると、彼女の深緑のスーツは、襟の部分が黒いヴェルヴェットであしらわれている。

「どうやって、この楽団を見つけたの？」と、彼が尋ねる。

「ここの大学の研究生なんです」

「ウィーン音楽大学ですか。じゃあ、もう、プロだね」

「いいえ……これから大事なオーディションがあるので、もう少し鍛えないといけないんです」と言いながら、彼女は少し怪訝そうな顔をした。

「試験は、いつ？」と彼は聞いたが、しまった、唐突だったかも知れないと後悔する。

「まだ少し先で……」と言って彼女は目を伏せた。

彼女はやはり、色が白いようだ。

「それじゃあ……希望と期待の日々ですね」と彼が言う。

「いいえ、とんでもない」

彼女は、また少しはにかんだ。

そして少し語調を強めて、言った。

「私、今、待機中で……書類審査やCD審査は通ったけど、まだ本番を控えているんです」

フィッシュマン先生が指揮台に戻り、少し短気っぽく、タクト棒で指揮台をたたいた。練習再開だ。

最初の曲は、ビゼーの「アルルの女」。

フランスの作曲家はフルートを多用する傾向があり、ビゼーも御多分に漏れず、この組曲の優雅な「メヌエット」や早い踊りの「アランドール」でフルートやピッコロを主役に仕立てている。

それゆえチュンさんもイサムもよく練習し、特にイサムは銀のフルートを黒いピッコロに持ち替えて、成果を披露するのであった。

彼らは、ともすれば高音域の伴奏や効果音中心になりがちなので、

主旋律を受け持つ場面は、とても気分が良い。

チユンさんのソロで奏でる「メヌエツト」は甘く、優雅で愛らしく、あくまでも流麗だった。

続くは、シュトラウスの喜歌劇「こもり」序曲。

そしてチャイコフスキーのバレエ組曲「クルミ割り人形」から「金平糖の精の踊り」。

一時間くらい経っただろうか。

ようやくマエストロが練習を終わりにしてくれた。

イサムは手早くフルートをケースにしまい、ヴァイオリンを操っていた彼女のところへ、足早に行ってみる。音楽家は解放されたくて、早めに逃げてしまうので、すばやくつかまえないといけない。

「津軽さん！」

「ハイ」と振り向く津軽さんの目はフレンドリーだった。

「一緒に帰りませんか？」

「ええ」と言っただけで彼女がうなずいた。そして嬉しそうに身支度を急いだのである。

彼女が楽器をケースにしまうと、外側に黄色いテープで、MとTの大文字が記されていた。

ウィーン音楽大学の建物からヨハネス通りに出ると、あたりは真っ暗だった。

「わあ、寒い！」

さすがにまだ二月だ。

玄関の外の石の階段に出てきたところで、イサムは手を伸ばし、彼女の手を支えてあげる。

彼女は少し恥ずかしそうな顔をしたが、彼は、こういう気遣いはウィーンでは当たり前、と言う態度。

階段を降りたところで彼女の手を離す。そこでイサムは、身長がちょうど釣り合う、と感じたのであった。

そして二人は、コツコツと石畳を踏みしめ、夜道を歩きはじめた。電灯はまばらにしかないが、楽団仲間が同じ道を急いでいるので、心強い。

「慈善団体のオーケストラって、面白いですね、色んな方がいて」と、彼女が話しかける。

「そう、基本的にアマチュアだけど、優秀なメンバーもいるんです」「フィッシュマンさんは、あそこの教授だし……」と、彼女が独り言のような言い方をする。

「津軽さんのお国は、どちら？」と、イサムが尋ねてみた。

「東京です」

「なるほど……僕は、札幌……」

二人はようやく、ケルントナー通りに出てきた。目抜き通りは、さすがに明るい。

結構、人通りがあるが、ガラス工芸のロブマイヤーとかベネトンとか、有名ブランドのお店は、ほとんど閉じている。

この街に特有の、赤、黄、紫色の丸い影絵風の光の広告が、足元の石畳に突然投影された。

「連絡先、教えていただけますか？」と、彼が別れを意識し、声をかける。

「ええと、メルアドを教えていただければ……」と彼女が躊躇しながらつぶやく。

イサムは、コートの更に奥の上着の内ポケットから手帳を出すと、空いているページに、`isamu@cello.at`と、丁寧に書き込んだ。そして、

「はい」と言って、その紙を彼女に手渡した。

彼女が、うやうやしく受け取る。

「それじゃあ、ここで」と、イサムが別れを告げた。

「じゃあ、また」と彼女が手を振る。そして足早にケルントナー通りを北の方向に去っていった。

津軽さんか、なかなか可愛いし絵になるね、との思いを抱くイサ

ムであった。彼女は、今まで見てきた留学生とは少し違うかも知れない……少々自信ありげだし。

イサムに彼女から電子メールが届いたのは、その3日後だった。「パソコンをつないだばかりで調子悪く、連絡遅くなりました。今後ともどうぞ宜しく。津軽マミ」

発信元は「mamitatsu@hotmail.com」であった。

「なるほど、名前は、マミ……随分と、じらされたもんだ」と思いながら、彼は早速、返信する。

「津軽さん、メールどうも有り難う。来週の土曜日あたり、一緒に出かけてみませんか？ 天気がいいと、とても気分良いですよ。国谷イサム」

意外と早めの返事が来た。

「メール、うまく届いたようですね。実は、暖かい帽子を買いたいのですが、お店もよく知らないなので、御一緒にいただけませんか」
今度は、電話を入れてみる。

「帽子屋さんなら、シンガー・シュトラッセのそばに一軒あるけど、行ってみない？」

「それなら、とても近いので……よろしくお願いしまーす」

「それじゃあ、来週の土曜日、11時半に現地で会わない？ 地図を見て、来られる？」

「多分、大丈夫」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0149t/>

1.フルートとヴァイオリン

2011年8月7日03時21分発行